

私たちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスに着き、そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。安息日に、私たちは町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、そこに座って、集まっていた女たちに話をした。ティアティラ市出身の紫布を扱う商人で、神を崇めるリディアと言う女も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、その時、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言って、無理やり招き入れた。（使徒 16:11～15）

パウロ、シラス、テモテの三人は、トルコの最西端トロアスまで来た。その夜、パウロは、一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、私たちを助けてください」と懇願する幻を見た。パウロは神の招きだと確信し、マケドニアに行く決心をした。「私たちは」と一人称、複数で書き、三人にパウロの愛したルカが加わっているように書いているが、ルカは加わっていないだろう。「私たちは」という言葉は、宣教旅行の重要な転換点を強調しているのではないか。三人は、トロアスから船出してサモトラケ島に直行し、エーゲ海を渡り、翌日ネアポリス着いた。そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民市であるフィリピに向かった。フィリピは行政、文化、町造りなど、ローマに模した小さなローマであった。この町に数日滞在して、安息日を待った。パウロはいつも安息日に、ユダヤ人の会堂で宣教を始めていた。ユダヤ人は、他国に来た時は必ずその町に会堂（シナゴグ）を建て、ユダヤ教の礼拝を守っていたが、フィリピにはユダヤ人が少なく、会堂はまだ建っていなかった。ユダヤ人は清めの儀式を行うために、水のある川岸に集まり、祈りの場を持つはずである。町を出て、祈りの場となるような川岸を目指した。案の定、川岸に集まっていたユダヤ人とユダヤ教に改宗した女性たちがいた。パウロは、彼女たちにキリストの福音を話した。その中に、ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神を崇めるリディアと言う女がパウロの宣教を聞いていた。リディアは、トルコの西に位置するティアティラ市出身で、神を崇める、即ち、ユダヤ教に改宗した異邦人である。そして、紫布を商う職業婦人であった。紫布は高価な布で、裕福な人が着る布地であった。ユダヤには職業婦人は殆どなく、パウロは彼女のような働く女性に会ったのは初めてではないか。神がリディアの心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。そして、すぐに、パウロの語る福音を受け入れ、彼女も家族の者の洗礼を受けた。更に、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言って、自分の家に無理やりに招き入れた。ここには、ドラマチックな福音との出会いがあった。彼女は、ティアティラ市から異教のフィリピに来て、職業婦人として働いている。そうせざるを得ない事情があったのであろう。しかし、彼女の生活は辛いものが多々あったに違いない。それを、唯一の神、そして、倫理的に厳しいユダヤ教に改宗することによって、自分を懸命に支えていた。ところが、パウロの語る福音は平安と喜びに満ち、何よりも時代の価値や常識に縛られない自由があった。彼女は、経験したことの無い解放を味わい、即座に、福音を信じ、洗礼を受けたのである。これは、私たちが福音を知らされた時、入信した喜びと解放と同じである。